

学生フォーラム

第91回 湯浅万紀子教授インタビュー 「博物館で博物館を研究する」

今回は、北海道大学総合博物館の湯浅万紀子教授を訪問した。湯浅先生は、「記憶の中の博物館」をテーマとし、来館者への調査から博物館の存在意義についての学際的な研究を行い、同館の学生教育でも中心的な役割を果たしている。学生時代から現在までの経緯を聞いた。

1. この子ども達は一体どんな大人になるのだろう ——研究の出発点を教えてください。

子どもの頃から博物館はずっと好きでしたが、学部時代の専門は英文学です。母校の英語科で助手を務めた後民間のシンクタンクに就職しました。そこで、企業の博物館構想をまとめる依頼を受けました。博物館を「つくる」という観点から博物館を見て回っていた中、ある科学館で子ども達が楽しそうに活動していました。私が見えないような実験器具を扱っていたり、自由研究をしていたり。その様子を見て、「この子ども達は一体どのような大人になるのだろう。この子ども達の未来を見たい」と思ったのが、研究の出発点です。もちろんタイムトラベルはできないので(笑)、その人が過去を踏まえて今どのような大人になっているのかを調べています。

入館者数や企画展の開催回数などが館の評価基準の中心になるという現状にも不満がありました。来館したことで「人々に何が起こったのか」を調べるのが重要です。

そのような問題意識をもっていたところ、東京大学大学院に文化資源学専攻が新設されるという記事をたまたま見つけて受験しました。1期生です。専門も年齢も経験も研究分野もさまざまな学生が集まり、文化資源とは？文化経営とは？と熱く論を交わすのは、刺激的でした。

ただ、私が取り組みたいテーマに直接つながる講義がなかったのです。そこで、「評価」をキーワードに、博物館に関連しそうな教育学や、社会学、科学教育など、幅広く勉強をしました。いろいろな授業、大学、博物館を渡り歩いて、話を聞いたり、話を聞いていただいたり、調査に協力していただいたり、ということを積み重ねて研究を進めていきました。当時は「重要そうな研究だけど、実証できるかな」と言われることが多かったです。どうしてもそれを知りたいという一心でした。

——東大にも博物館がありますね。

本郷の本館と小石川分館の2館で、展示評価や展示制作など、実践しながら勉強できたことはとても良い体験でした。特に勉強になったのは、展示制作のプロセス



図1 湯浅先生の研究室にて。歴史を感じさせる書棚には、幅広いジャンルの本が並ぶ

と来館者からのフィードバックなどをまとめた報告書づくりで、ほぼすべての展覧会で作成しました。実験的な展示も可能で、例えば、全くキャプションを置かない代わりに学生が解説をする展覧会を開催しました。実験的な展示に対しての答えを出せたことはとても重要だったと思います。

2. 学生の記憶に残る博物館体験を

——その後、東大から北大に移られています。

北大総合博物館と、理学院自然史科学専攻科学コミュニケーション講座博物館教育・映像学研究室の教員を兼任しています。博物館では、展示の企画も行いますが、学生教育やボランティアマネジメントなど、人に関する部分を中心に担当しています。

私自身が東大の総合研究博物館でのびのびと活動させていただけたので、北大でも学生にそうしてほしい。自分の研究以外でも、可能性を伸ばして行ってほしいという想いから、北大独自の博物館教育プログラム「ミュージアムマイスター認定コース」を設置しました。

このコースは北大の基本理念の一つである全人教育の一環で、博物館の資源を生かした教育プログラムです。学芸員養成課程を履修中の受講生が多く入っていますが、学芸員養成課程からは独立しています。本物の標本を扱ったり、展示制作をしたり、解説をしたり、ワークショップを運営する中で、コミュニケーション能力や自己評価能力やグループワークの能力を養ってほしいと思っています。

今までに30人がミュージアムマイスターとして認定されました。登録している学生は150人ぐらいでしょうか。狭き門です。ミュージアムマイスターは、大きな

イベントの司会やスピーチなどを担当し、北大総合博物館の「顔」です。2016年のリニューアルオープン時には、ミュージアムマイスターが歓迎の言葉を述べて来館者を迎え入れました。年2回発行の「博物館ニュース」にも、記名記事を書いてもらっています。十分に準備した上で、「信頼しているから責任をもってやってね」と見守るスタンスで、仕事を任せています。

特徴的な取組みとして、毎年博物館では卒論発表会を開催しています。さまざまな学部の4年生が、2日間、博物館で市民に向けてポスター発表をします。ジャンルは問いません。発表者達は中間発表会でポスターを見せ合い、何度も修正を重ねてポスターをつくっていきます。市民に自分の研究を説明することで、コミュニケーション能力を養い、研究の見直しができます。修士課程に進む学生も多いので、その後の研究のヒントをいただいたり、激励されたり、良い交流の場になっています。キャンパスを訪れることがあっても北大生と話す機会はなかなかないので、市民からも喜ばれています。北大生を通じて北大を知る、まさに北大総合博物館のコンセプトである「365日オープンキャンパス」を象徴するイベントです。

うれしいことはいくつもあります。プロジェクト型授業で「1年だけの単発のプロジェクトで終わってしまうのが惜しい」と言ったところ、学生からの発案でミュージアムクラブ Mouseion ができました。展示解説や各地の館の見学などを行うサークルとして活躍しています。学生には、北大生としての重みと責任を意識しつつ、博物館での記憶をもって卒業してほしいです。

私の研究室は博物館にありますが、指導しているのは理学院の学生です。学生部屋は館の中にあり、私を含めた博物館所属教員と学生達が合同で使っています。古生物学や海藻、鉱物、博物館教育など、違う専門分野の学生が混ざったような状態になっています。

——大学のなかで特に博物館に所属しているということ意識することはありますか？

「博物館の教員である」という意識はあります。博物館教育の研究者としての教員というのは珍しいかもしれませんが、博物館が研究対象なので、研究室を出たら研究対象がすぐそこにあるという環境は素晴らしいと思います。一方で、やはり学生と関わるのは好きですし、学生教育は大切だと思っているので、理学院と兼任して学生をもつことができるのはありがたいです。

3. 博物館の意義を探る

——今の研究について教えてください。

まず、来館者にとっての北大総合博物館の意義を探る目的で、同じ協力者に来館直後、1か月後、半年後、1年後の4回の面接調査を行い、記憶がどう変容するかを研究しました。その後、地域における博物館の役割に焦点を移し、名古屋市科学館と明石市立天文科学館で

調査を行いました。それまでは来館者を対象に研究をしていたのですが、このとき、博物館の職員にも調査対象を広げてみました。すると、子どもの頃の経験から職員になっている人がいることがわかりました。学芸員が唯一のゴールではないですが、そういう人が少なからずいることに注目しています。それが、博物館の活動に関与した・関与している人に対象を広げた、今のプロジェクトにつながっています。

異世代交流というテーマにも注目しはじめたところですが、高齢者への調査では、過去の経験をはじめ、子ども達に伝えたいことや、博物館での活動を通じた自己実現など、さまざまな話が聞けます。例えば、プラネタリウムの解説員に憧れていた高齢者が、今はボランティアとしてプラネタリウムに関わっている、というようなエピソードがありました。夢を違う形で実現しているということですね。

北海道に来てからは、共同研究を多くするようになりました。7～8年前から継続して、神戸学院大学で認知心理学の研究をされている清水寛之先生と、共同研究をしています。清水先生は量的な分析、私は質的な分析と、包括的な研究ができて、とても良い協力関係だと思えます。ブリティッシュ・コロンビア大学の David Anderson 先生は、科学教育や博物館教育が専門で、万博の記憶についても研究をされています。

——学際的な研究をされていますが、「専門は」と聞かれたらどう答えますか？

しいて言うなら博物館教育学です。〇〇学、といわなくてよいのであれば、博物館と社会との関わりを考える研究です。

——インタビュー調査が多いとのことですが、その際に、意識されていることはありますか？

常に問題になるのは語りが真実かということですが、同時に、本人が現時点で「そう思っている」という主観的現実を無視してはいけないと思います。辛い体験を後から「あれも必要だった」と意味づけることに注目します。時代背景や家庭環境など、いろいろな面から語りを見ていくことも大切です。例えば、家から科学館へのアクセスや、親の教育方針や、時代背景。1970年頃の思い出なら、万博があり、科学に夢をもっていた時代の話であるはずですが。

私の調査では博物館の記憶について語っていただくことが多いのですが、生き生きと楽しそうに語る人が多くてありがたいです。見たモノや、ミュージアムグッズを買った経験や、一緒に行った人との会話など、大事な思い出を意味付けられる場所にいられるのはうれしいです。

中でも、社会文化的なストーリー、つまり人との関わり思い出を聞くことがとても多いです。博物館というモノが前面に出がちですが、それだけではなくて、モノのストーリー、モノに関わった人のストーリー、モノ

を伝えていく人のストーリーがあるということ、再確認できたのは良かったです。それが、博物館がそこにあったことの意味、これからあり続けることの意味の一つになれば、と思いますね。

こういう調査は、調査対象館にも喜ばれることがあります。博物館側としても、自分達の存在意義や市民の目線を確認する機会になるからです。例えば、明石市立天文学館には特徴的な塔時計があるのですが、「忙しくて来られなくなったけど、電車の中から塔を見るたびに科学館のことを思い出していた」という趣旨の語りがありました。そういう従来の調査ではカウントできなかったような、いわば潜在的な来館者も見つけられます。

4. 心を開いてほしい

——若手研究者・学生へのメッセージをお願いします。

私は、学際的な共同研究にチャレンジしたことで、新しいものにたくさん出会えました。学生時代には、自分の専門分野を深めると同時に、いろいろな良い人と出会ってほしいと思います。食わず嫌いにならないで、心を開いてください。私の授業では、美術館、文学館、科学館、水族館などをケーススタディします。「私は美術館に行くから、水族館は関係ない」はもったいない。何か引っかかるものがあるかもしれません。

自由に他の場所へ出ていくことが許されていた研究室にいたことも大きいです。当たり前ですが、出て行かないと出会えないし、発信しないと知ってもらえないので。

そして、やはり好きな研究に取り組んでほしいです。流行ではなく、自分が本当に知りたいと思うテーマを見つけること。社会と関わる研究では、協力していただいた機関に意味があるものになれば、さらに良いですね。学生時代は、ある意味守られています。それを意識しつつ責任ある行動をして、広げて行ってほしいです。

研究やプロジェクトは、その場の忙しさに追われがちですが、プロセスを記録することは本当に大切だと思います。私の授業では、成果物だけでなく、毎週の授業の記録をホームページで公開しています。学生が記名で書

きます。休んだ人のフォローアップだけでなく、全員が共通認識をもてるという意味でも大切です。

——「博物館を研究する」ということについて、どう考えておられますか？

博物館は、まだまだ可能性のある分野です。さまざまな方向からの研究が必要なので、どんどんいろいろな人に関わっていただけたら、違う視点が得られるのではないかと思います。

私が取り組んでいるのは、来館者の体験を探る、人のありようを知る研究です。来館者の経験を知ることは、博物館にも来館者にも、当然研究者にも、メリットがあります。それによって他の来館者の体験の可能性も広がります。博物館の魅力を伝えるツールになるかもしれません。

北大総合博物館は「モノ・ヒト・コト」をキーワードにしていますが、ヒトとコトの研究は、まだまださまざまな分野からアプローチできると思います。

——今後取り組んでみたいテーマはありますか？

大学博物館そのものの研究をさらにしたいです。大学博物館は、実はあまり古くないのです。国立大学では東大が1996年設立です。大学博物館は、在校生、卒業生対象だけではなく、社会に大学の研究成果や資料をアピールするものですね。分類学などの研究の必要性を示せる機関でもあり、コレクションの保管という意味も大きいです。

大学博物館には、学生が常にいるのがうらやましいと言われます。ただ、来ないまま4年間を終える人もいるので、そういう学生のために、授業時間に重ならない夜に開館したり、学部の特徴をアピールする展示をつくらしたりしています。友達が札幌に来たときに案内できる場としても良いと思います。

博物館はいろいろなことが起こり得る場なのです。さまざまな方法で、博物館を利用してほしいと思います。

〔只木 琴音(千葉大学大学院人文公共学府),
林 侑輝(千葉大学大学院融合理工学府)〕